

夫に超ゆる程の語り人あれば、輕忽に吟味を盡さず語るべからず心ある人は腹裡に冷笑を催すに相違なし。豈に六つヶ歌藝にあらすや、宜く詳知せられん事を希望して止まざる也。

第九章 自作淨瑠璃節配り心得の事

太夫には太夫代々の秘傳とて種々の傳授あり、何れも見る處ろ説く處は多少の相違ありと雖も、大体は格別の相違なしと考へたり。尤此淨瑠璃に於ての節と陰陽の五行を表し、年中の四候七十二氣を象り、全体の首足整はざれば淨瑠璃とならず、去るによつて或る部分は春の如く一陽來復萬物氣朗か、優美にして物浮めかしく、或る部分は夏の如く火炎の立昇るが如きなれば、戰軍修羅あり、物凄まじく血氣熾なるべく、或る部分は秋の如く金氣殺伐の氣候なれば、萬物色を失して物淋び枯れ行く有様即ち哀傷腸を斷の歎曲調ふべく、或る部分は冬の如く四邊氷閉て寒風孤林の月を磨くが如く、寂寥閑靜物まめやかに音無しかるべしとや、去れば

自分が淨瑠璃を作くるに於ては、必ず左の心得あるべし。其二三の例を擧んに

節の跡は改むる心あれば、**心は中心をみ**と云ふなど、付べし。詞より地へかゝるには、**心は心**と云ふの類にて付けべし。

就中女のたをやかなる文句と位ある文句は、**むす**然るべし。

ウはハルにウあり中又ウあり依つて句切毎にウ付けるに及ばず、余は胡磨章にてしらすべし。

ハルの内にあたりある節は、一如此打つて知らすべし。中の内に下る心持ある節は、一如此打つて知らすべし。

節跡に地色付けるに句切りの内に詞に移る時は、詞落しに付べし。色は二重となるなり併し句切換れば差支なし。

第十章 三味線の事

抑も義太夫節の三味線は元來音色厚變にしてありと有らゆる社會

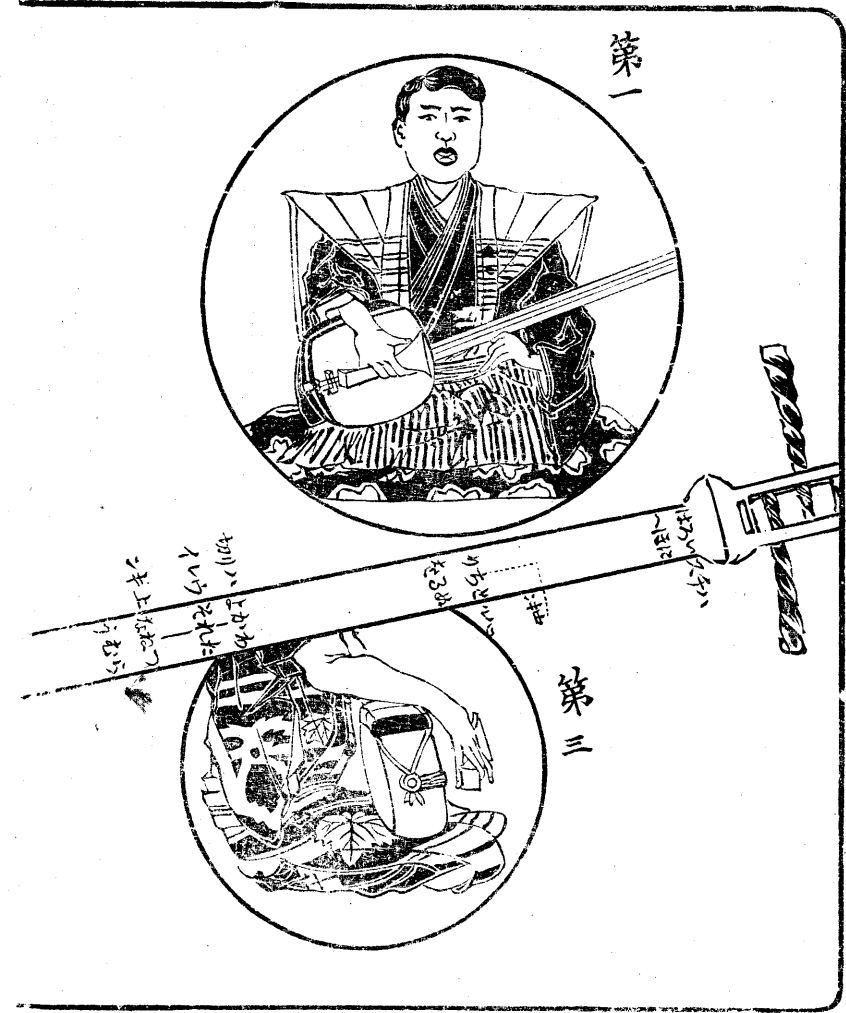
の實相を彈出す物なれば其初院本も多くは近邊の形容を第二にして、概
人の言語應對を主とし染々感情を動かしむる様書作したれば近邊の形
体即ち其場の有様戰闘にまれ指し向の口説まされ人に相應せねばなら
ず、仍て他の音曲とは異なり其人々健柔の差はあるとも平常に發する言
葉に合して諸萬の實態を彈出すなれば清元の如く端歌の如くにては、不
都合なるに此頃専ら流行する物を聞くに只地合の派手を好むのあまり
目量の重き駒を掛け薄皮を張つて多くはかけ撥すくい撥を多分に加へ
地合の情を失して古人の定めたる方は自然に覺束なき様に成至りたる
事實に淺間しさの限を知らず克々師匠の方を失しなはざる様心得べき
事也、左れば前へに述べる如く音厚鑿にして清元杯に間違はざる様謹ん
で弾くべしと雖も世話物景事等は時代物の如く厚き音色は不都合なり
程克く其人の音と語り物の心を吟味して弾くべし、附けて言ふ調子の事
は書くに書かれず以心傳心微妙の深味なれば少々甲斐なれど附録竹

の小巻田に述置きたれば、右に付き其大概を會得せられん事を望む

第十一章 三味線彈き方心得

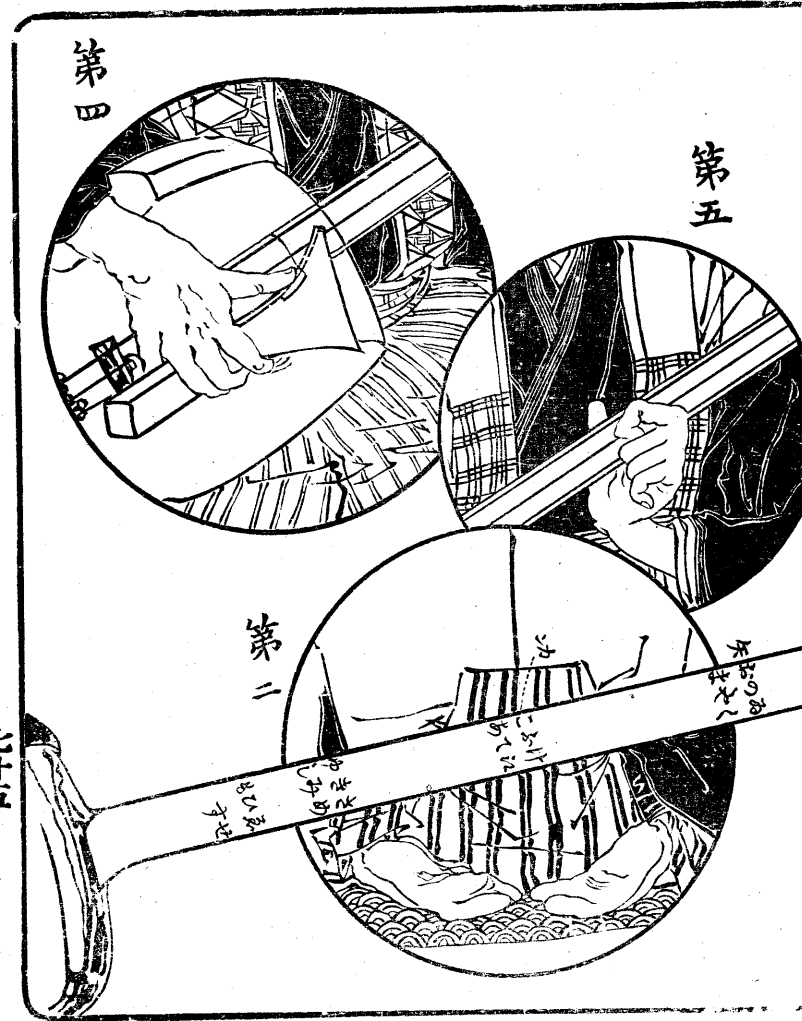
三味線の彈方は、是又淨瑠璃語り構の如く、形ち正しく第一圖の如く端座
し膝を少し割て第二圖の如く、疊に臀部を落付け第三圖の通り、右足の膝
頭より凡そ二寸手前に三味線胴を少し斜に置き、第四圖の如く胴掛の正
中に右手を置き、左手の力らを借らず三味線を持こたふるべし、然して撥
を圖の如く右手の小指と無名指との間に、小指を折屈がまざる様指の先
きを圖の如く折り親指を一ばいにはり、總て手先に力らを入れず、撥を輕
く持つべし、輕く持つとい彼の書家が筆法を教ゆるに際し、掌又玉子を握
つた儘筆を持てと云へると同一法あり、即ち之れの手先きにて弾かず全
体の力らを腕に集めて弾くべし、左れば社此義太夫三味線は三味線を
鳴らすにあらすして精神を彈き鳴すものと心得べし

傳 秘 瑠 璃 淨



傳 秘 瑠 璃 淨

傳 秘 瑠 璃 淨



傳 秘 瑠 璃 淨

傳 秘 獨 溜 滴

()

三味線 朱 并に略符の解

弾き方面解
と朱照(とる)

三の糸

いにとぬわとつらぬ々け江きめゑ也
一ムとヌエつらぬクケエ甘メゑ也

二の糸

ろほちるかれねむのやふてきみひす
ハにちるハれんかノヤムテキミヒス

一の糸

はへりをよそまうおまゑあおしも
七ヘリヲヨソマウオマエアウシモ

傳 秘 獨 溜 滴

傳 秘 獨 溜 滴

○ 朱略朱の解

一第

合

合の手のし

二第

必

四つまのし

三第

五

みつゆのし

四第

フ

地を待つあいの

五第

リ

すり込のし

六第

モ

上のし

七第

双

下のし

八第

夕

シヤンのしるし

九第

夕

シヤンくのし

十第

セ

チンチンチンチンチンチンチン
テンのしるし

十一第

セ

チリチ、テンのしるし

十二第

ノ

一の糸すり上げすりをしるし

十三第

ノ

二の糸右全断

十四第

ノ

三の糸右全断

傳 秘 獨 溜 滴

海 溜 璃 秘 傳

重せんが仕合とはあらまのり入
 ぬ先きうぬ祝さうとて端ぬうも
 付ぬとは曲があらうま何んが
 おまゝ糺はせぬとてあてぬれ

淨 智 瑠 秘 傳

傳秘摘溜海

[illegible]

海 智 瑤 秘 傳

第十二章 三味線符号并手附の解

八十

三味線の朱と節に對する音色の記号なり即ち圖の如く一線に十六のつばあり三線合せて四十八つばあり之れを符はいろは四十八字を以て往古より記とし尙三味線曳名くの流により大体は格別の相違なければ他に盜まれぬ様とか或は多分にある手は畧する杯にて多少の異動あり尤も平常多く用ゆる部分は左の如く畧したれば宜敷服膺せられんには一段と面白かるべし總て素人の三味線を習ふも随分熟達せでは師匠は教へねば特に是に之れを顯すなり若し面倒を厭はず覺られんには遠記憶を心得たると全斷他の朱附したる物を見るも彈試むる事の自在にして朱附したる曉は滅多に失ふ事なし是非三味線を知らぬ人と雖も詳悉し置くべき必用儲にありとす尙朱入れの例を玄めしたれば再三彈試みられなば直ちに會得出來べし

第十三章 論 結

世界廣く國夥敷あれば其國々の樂曲擧げ尽し難き程有と雖も我日本の淨瑠瑠社は萬邦絶倫の妙曲にて近頃西洋の文物迭に輸入するに從ひ我が事情に通じたる西洋人は絶叫する迄に稱賛する程の淨瑠瑠理ありても、營業者を差し置いてと多年の習慣頗る自駄樂極る陋風よつて、此く六ヶ敷美妙の優藝偏に慰に習ふ迄とは云へ實に不規則至極の稽古法によつて流行する事の残念千萬と堪へねば、尽したりとは申されねど抑も淨瑠瑠理を學ばんとする者の心得置るざる件心に浮び上る儘すくひ取つて擧げ連ねたる事前段の通十數章の多きに及びたり、少々粗漏はありと雖も格別の事はなかるべし、即ち之をして順序通り稽古せんには著しき進歩は勿論一旦覺へたる事は篋の底に蓄置く速も記号に目標あり滅多に忘るゝ氣遣なきは勿論尙文才家ハ已がじ、新曲を作つて節を配り手を附けん事實に紙捻りをひねるよりも容易なるは勿論三味線を少くなりとも弄する人は又一段と面白あるべし、仍つて已上の各章師に

八十一

就きて事に觸物に當つて研究せられんには、殆んど學事を修業するが如く順序立つて彼の二三年立つともハルフの一何が何やら譯らぬ様をかむしや連の跡を絶つ事予鋤月は保証致置くも格別差支なるべしと存じたり左れば本書は細微を尽さいれども前章に述べたる如く順序を追て習熟する方法を定めたるものなれば、本書を階級稽古法と稱へたるに實に當を得たる者と云はざるを得ず、之れ藝道とは云へ茲に至つては義太夫學也江湖の諸賢徒らに讀流しにせられざる様希望して止まざるなり

石村檢校 竹廻小田卷

山田鋤月 著

上の巻 口

志賀の里石村住家の段

抑もく松の深縁換らぬ空の天と清み地と定りし開の昔出雲八重がき妻とめに語らいそめて戀初めて妹と脊子との色わけて、染めて着あして空だきのけむりに匂ふ袖袂かざすは花の朧夜に、其の下蔭を栗りにて操り廣げたる其文の頃は文祿初つかた、洛東志賀のはとりに栖む、石村と云ふ檢校あり生れも附かぬ盲目の春は來れども只夢斗りの浮世とて哀れ栗津の一と睡り心にもなき韓鞞の曉き破る三井の鐘算ふる袖や時雨ふる、松唐崎に濡増して、堅田にあらぬ盲目の片輪車の糸と尙又たつれに取出す琵琶の音色は、逢阪の開の草蔭の柴の扉にふり捨られし蟬丸が古を茲に曳く關や、りんくとして若駒の轡の響呀渡る、みがきが原の明